

カトリック六甲教会 教会報

2010

4

No.460



ご復活おめでとうございます！



主任司祭 松村

今年のご復活は穏やかな春の陽気に迎えられ、爛漫の桜が至福の喜びのしるしとなりました。今日のこの喜びを生涯忘れることなく心に留めましょう。

昨年度は皆様に大変ご迷惑をお掛けしましたが、今年度から出来る限り皆様のご期待に添えるよう努めます。その為に『この道』に一度きりしかない人生を賭けたのですから、桜の花のように「咲いた花なら散るのは覚悟」、己のためではなく人のために捧げる覚悟で「咲かせてみせよう六甲燦」に努力します。但し、まだ“つぼみ”も付いていない状態、皆様からの更なるご協力を必要としています。よろしくをお願いします。

さて、今年度に期待する具体的目標は、教区からの指針と合わせて考え、次のことを目標にします。先ず、第一に毎日の福音から心を動かされる「み言葉を心に留める」こと、次にそのみ言葉を受けて何かに「気づく人になる」こと、そして第三に気づかせて戴いたら「謙虚になる」ことです。そうすることによって自ずと心の中から感謝の気持ちが湧いてくるのではないのでしょうか。

人によって感じ方は、異なるでしょう。しかし、み言葉は同じであり、目指す目標も皆同じはずです。例え感じ方は違っていても、み言葉の中で働かれる神は、あなたに今一番必要な“大切なメッセージ”を気づかせてくれるでしょう。その気づきを大切にしましょう。その気づきこそ、あなたの生き方の大きな支えとなり、福音宣教の力となるからです。

また気づかせて戴いた大きな喜び、その喜びを同じみ言葉で祈る仲間と一緒に“分かち合う”機会を持つことを勧めます。互いにその喜びを分かち合うと共に、喜びを共感共有することによって、互いの交流を深め、同時にみ言葉の気づきからくる喜びを一層豊かにしてくれるからです。勿論、分かち合うのは喜びだけではないでしょう。時に、苦しみ、悲しみ、寂しさと言ったマイナス要因もあるでしょう。しかし、驚かないでください。それは、分かち合いの深まりのしるしであって、互いに心の扉を開いている証拠なのです。そんな分かち合いが出来るようになれば、その共同体は確かにキリストによって期待される共同体と成熟していくでしょう。でも焦らないでください。キリストはいつも私たちを待っていてくださっています。

み言葉による共同体の輪（和）が、世代を超えて広がっていくことを期待します。でも期待しているだけでは創れません。先ずは実践です。

さあ！あなたもみ言葉を信じて新たな喜びの旅となるように、あなたご自身から始めてみませんか。

みんなの広場

みなさまの分かち合いの場になれば、と「みんなの広場」を設けました。みなさまから原稿を頂戴しなければ成立しないコーナーです。どうぞご参加下さい。

聴くことの恵み

主のご復活を迎える喜びと共に、「聖書の通読クラス」は、みんなそろって2年生に進級いたしました。「毎週ですか?」「3年もかかるんですか?」と、多少の不安を抱きつつ、仲間と共に、昨年のご復活後、「初めに、神は天地を創造された。・・・」(創世記1章)から読み始めました。ところが、回を重ねるうちに、みんな「神の言葉」に、はまってしまいました。不都合な真実が語られていても。

<案ずるより、生むが易し。>ですネ。「歴史書」を終えて、4月から「預言書」に入ります。

2008年のシノドスの議題が「聖書」で、その時教皇様は、聖書の専門家が必要なことを認めつつ、次のように語られました。

「聖書は、万民のためのものであり、学者のためのものではない。聖書の本質的な意味は、素朴な信者も十分理解できることである。・・・聖書をみんなで読むことが、カトリック教会内ではまだ十分ではない。」

個人での「聖書通読」の経験はありましたが、グループを担当したことのない私にとって、教皇様のお言葉は、励みになりました。私は上京の時を利用して、「聖書100週間」のクラスを見学し、経験者の話を参考にしながら、やり方は六甲教会の現状に合わせました。皆様の協力を得て、やっと軌道に乗ったところです。

今、私が一番感じていることは、「神の言葉」のダイナミズムと聖霊の働きです。「通読」で一番大切にしていることは、各自の「感想と祈り」をひたすら聴くことです。“何を言ってもいい”これは大きな魅力で、お互いにとって楽しいひと時です。(ただし3分以内)一人ひとりの言葉をひたすら聴く時、一人ひとりのうちに聖霊がいらっしゃることに、自分が聖霊に聴いていることを、だんだんと体験するようになりました。感想を述べてくださった方に心から、「ありがとうございます」の言葉が出てきます。<聴くことの恵み>は、何と大きいのでしょうか。私は他に、入門クラスを担当して、自分が話すことが多いのですが、「聖書通読クラス」を担当するようになって、自分の言葉のむなしさを痛感しています。

さあ、これからも仲間と共に祈りあい支えあって、「聖書通読」の旅を続けましょう !

(Sr. 出口)

昔の説教

1985年から1986年にかけて主日の一番遅いミサ(11時)でオルガンを弾いていた。その頃、このミサは殆ど佐々木神父の担当だった。

師の説教は淡々とした語り口であったが、はっきりと聞き取れ、しかもその内容は心に沁みるものであった。その場限りに聞き捨てるのは勿体ないと思い、1年ほどの間師には無断で説教を録音し、テープ起こしをして時々読み返していた。

折角の記録もその後転居の際、行方不明になってしまった。ところが最近片付けをしていて偶然発見

し、また読み返している。独占するのは勿体ない内容だが、無断で録音した、いわば盗品だから公開することもならない。

佐々木神父の説教が印象に残るのは、ひとつは淡々とした語り口で、聞く者がそれぞれ自分への言葉として聞き取ることと、言葉がはっきり聞き取れることにあると思われる。その頃、同じミサで他の神父の説教も同じ条件で録音していたが、プレイバックすると聞き取れない箇所が少なからずあり、中には説教全体が推測しなければならないようなものまであった。その場で説教を聞いた信者も説教はよく聞き取れなかったと思われる。説教は聞く人のためである。いくら内容に思いを凝らしても、聞く方が聞き取れなければ無意味である。

説教はその場限りである。聞いても内容が記憶されることは殆どないと言ってもよい。これでは勿体ないから記録印刷して、配布するのはどうだろうか。口頭の説教を文字にすると、文章としては整わないところができるが、はじめから文字で書いたものよりは息吹きが感じられて、印象が強くなるようだ。

言葉はもともと口から出る音声であった。音声はその場限りで消えてしまう。音声をそのまま文字で記録することをもっと利用してもよいのではないか。現在の日本語表記は、音声の言葉を文字にして記録することにそれほど困難でないことを実際に体験している。 (ヨハネ 三好)

春の高学年錬成会

3月20日(土)～21(日)に教会学校では高学年錬成会を行いました。テーマは「チャリティを創ろう」ということで、ハイチ大地震によって被災された方々のための募金活動を行いました。

20日(土)は阪急六甲駅前にて午後2時半～5時まで行った街頭募金では、計99,500円が集まりました。また、21日(日)には、9時ミサと11時ミサの後に教会内にて募金活動を行い、計124,716円集まり、2日間の募金総額は224,216円となりました。ご協力して下さった皆様、ありがとうございました。

今までに教会学校ではチャリティとして、何か小物を作ってバザーに出品したり、ユニセフ募金やペットボトルキャップ回収をしてきました。今回は街頭募金という、自分達が外に出る活動を初めてしました。まずはハイチに関するビデオを見て勉強し、そこから街頭募金に必要なもの(呼びかけ文、ポスター、募金してくれた人へのお礼の手紙と折鶴、たすき等)を準備しました。本番、最初は少し緊張気味の子ども達でしたが、段々と呼びかける声が大きくなり、途中からは呼びかける言葉をその場で考え、呼びかけていました。

錬成会の最後に、今回の募金を入れた箱を一人ひとり持ってみました。「とても重たい。」という感想ばかりでした。そこで、「その箱の重さは募金してくれた人達の優しさだよ。大切にしたいね。」という話をしました。みんなが優しい気持ちになれる錬成会でした。

街頭募金のような、「いいこと」を自分達だけではなく、たくさんの人を巻き込める、たくさんの人に「いいこと」をする機会を作るような活動が今後の教会学校には必要な事だと思いました。今後とも教会学校の活動にご協力よろしくお願ひ致します。 (吉村)



四旬節の「十字架の道行き」の祈り



四旬節が始まってから毎金曜日朝 10 時から、聖堂で数十名から百名ほどの熱心な信者の方々による集会祭儀と十字架の道行きが行われました。震えるような寒いときから始まり、やっと温もりを感じる第五週まで“イエスの受難と死”を共に歩みました。

最近、何処の教会を觀ても信心行といった事に対する毛嫌いと言うか、無関心と申しますか、殆ど見ることがなくなり一抹の寂しさを感じていました。幸い山口でも、そして、ここ六甲教会でも皆が集って十字架の道行きをする姿に、喜びと安堵感を覚えます。

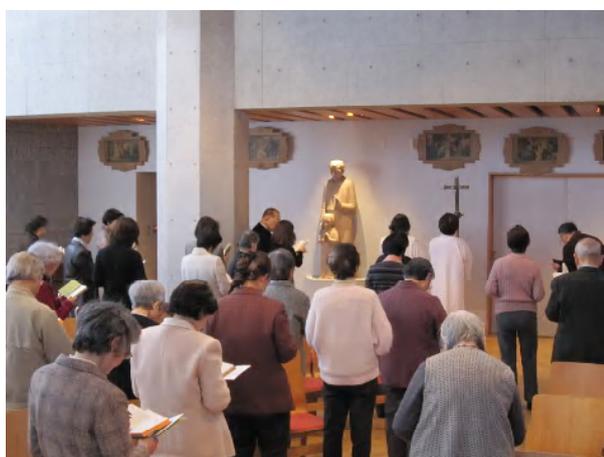
一口に信仰を深めるといっても、なかなか一筋縄では出来ないものです。執拗に“何か良い方法が”と尋ねられても、そんな簡単に信仰が深められるものが、あちこちに散在しているわけではありません。また「信仰とは何か」と自分に問いかけてみても、言葉で理解していることを口に出すだけでは、信仰を知っているけど持っているとは言いがたいでしょう。つまり信仰とは、「言葉だけではなく、行いにおいても」という愛徳の実践をする人こそ信仰を持つ人であり、信仰を深める方法でもあるということでしょう。

一方、あまり熱心に信心行に関わると「狂信者であるとか、目立ちたがり屋さん」とか言われます。確かに、あまり形だけにこだわりすぎては問題ですが、形を自然にあたりまえのこととして実践するとき、本来の信仰の姿、信仰の形というものが自ずと目に見えてくるのではないのでしょうか。

信心行だからとおぎなりにしないで、信心行だからこそ「信仰を深める大きなチャンス（機会）」だと思って努めるとき、いつの日か日常生活の必需品のように自然体となって、あなたの信仰が形となって表現されているのではないのでしょうか。

ただ闇雲にみ言葉を投げかけるよりも、あなたの自然体を現すことこそ、真の福音宣教に繋がるのではないのでしょうか。

主任司祭 松村





「音楽関係の奉仕者の集い」を終えて

ミサの中の音楽は、教会の祈りの大切な一部です。そこでより深い祈りができるよう、2月21日、音楽奉仕者の集いが開かれました。音楽奉仕者全員で集まるということは今回が初めての試みということですが、オルガニスト、ギタリスト、独唱者の交流が持てた今回の機会は、オルガニストである私にとってとても貴重な時間となりました。

前半は松村神父様より、今の六甲教会の典礼に必要な音楽とはどのようなものであるかについてのお話を伺いました。そして後半は各奉仕者グループに分かれて、今後どのように奉仕をしていくかということや、音楽奉仕者に求められているものとは何かということについてわかちあいの時間を持ちました。中でも一番印象深く心に残ったことは、松村神父様がして下さった、そもそも典礼とはどういったものであるのかというお話の中で、「自らの使命を教えていただき、それを受け入れるものである」ということでした。

私事ですが、幼い頃はじめて音楽に触れたのは、ある音楽教室での体験レッスンがきっかけでした。その日初めて会う他の子供達と一緒に、カスタネットや鈴などを振って、その日初めて聴く歌を先生に教えてもらいながら歌いました。あの時に感じた一体感のような不思議な喜びが、今も私が音楽を続けていることの原因のひとつになっています。帰り道では、その日初めて聴いた曲を、初めて同士のお友達と、大きな声で歌いながら、ずっとずっと笑っていました。歌を通してひとつになれたと、幼いながらも大きな喜びを感じていたように思います。

松村神父様は、ミサとは共同体として祈ることで、皆でキリストの御心を共有するものだとおっしゃいました。そうしてキリストの神秘の劇的な再現を通して、いかにしてキリストが御父のもとに導いて下さるかを、私達は心のプロセスとして深くとらえる必要がある、と。この「共同体として祈る」こと、それは私にとって正に「共に歌うこと、音楽を奏でること」なのです。皆が心を合わせるために、音楽は素晴らしい役割を果たせると感じています。松村神父様のおっしゃった信者としての“使命”というものも、私にとっては音楽の奉仕を通して見つけられるように思っています。

それにしても、使命とは何て大それた重みのあることなのでしょう。使命とは、与えられた重大な務めであり、責任を持って果たさなければならない任務なのです。オルガニストである私の使命とは、自己満足の音楽ではなく、そこで祈る全ての方がより深く祈れるように、またより心をひとつにすることができるような音楽を奏でることにあると思うのです。それは実現できればとても素晴らしいことですが、そこに到達するのは容易いことではありません。練習不足の時など、技術的なことにとらわれて、私自身全く祈りとは程遠い状態に陥ってしまうこともあります。今日はきちんと弾けるだろうか、あの部分はどのように弾くのがよいだろうか、歌とのバランスはあっているだろうか、といったようなことをあれこれ思い悩むこともあります。自分の弱さや足りなさを全て主にゆだねることができればどんなに素晴らしいだろうと思います。ミサが終わるといつも、全てを主にお任せすることができるよう、やはり日頃から努力するということを怠らないようにしなければと強く感じています。主の前で恥ずかしくない自分であろうと努力すること、音楽奉仕を通して私は常にそうあり続けたいと祈っています。

今後、パイプオルガン導入にあたって、おそらく音楽面において大きな変化を迎える六甲教会で、自らができる最大限を尽くしたいと考えています。いただいた恵みに感謝。(松井)

「音楽関係の奉仕者の集い」に参加して

はじめに松村神父さまから「典礼と音楽」のお話があり、そのなかで「典礼を儀式としてだけでなく、心のプロセスとして捉える」ことを教わりました。ミサ全体でひとつ、ということをお忘れなく、ふさわしい心で与り、また歌うことができますように、という思いを新たにしました。

次に聖歌奉仕者の話し合いがありましたが、今まで一堂に会する機会はありませんでしたので、とても新鮮に感じられました。話題は「奉仕の心構え」、「独唱の心の準備」、「技術面の準備・練習の方法」、「普段からの心がけ」他、大変多岐に渡りました。よい刺激をいただくことができ、有意義な時間となりました。今自分にできることは？ よりよいことは？と折りにふれて問いながら、初めてミサに与ったときの感動や洗礼を受けたときの気持ちを思い出しながら、ひとつひとつの機会を大切にしていけることができますように、という思いを新たにしました。(青地)



∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞ 各 部 だ よ り ∞∞∞∞∞∞∞∞∞∞

☞ 壮年会

- ・4月4日(日) 11:30~13:30 壮年会総会
(第1, 2会議室)

☞ 養成部

- ・4月9日(金) 10:00 祈りの道場
15:00 ミサ (主聖堂)
指導: 片柳 神父

☞ 婦人会

- ・4月より新しい年度が始まります。
今年度は以下のメンバーで役員を務めさせて頂きます。
皆様のご協力をよろしくお願い致します。

会 長 久野
副会長 河野
会 計 大林
伊藤
書 記 福留
豊岡

☞ 社会活動部

- ・4月7日(水) 10:00 手芸の集い
- ・4月10日(土) 10:00 炊き出し
- ・4月18日(日) ミニバザー
- ・4月26日(月) ともしびケーキづくり

☞ 教会学校

- ・4月9日(金) まで春休み
- ・4月10日(土) 入学式・始業式
- ・4月11日(日) 初聖体・祝福式
式後祝賀会パーティ
- ・4月17日(土)、24日(土) 通常



「手作りコーナー」メンバーより

教会の活動の一つとして、毎月第3日曜にイグナチオホールで手作りのものを販売しているコーナーから、感謝のご報告をさせていただきます。

メンバーは10名ですが、手作り弁当、炊き込み御飯、お寿司などを作っています。またパンやケーキ、手芸品から植木、贈答品等のご寄付を頂いています。

一方では信徒の方々のお買い上げのご協力を頂き、いつも温かいご支援にメンバー一同、心より厚く御礼申し上げます。

表のように、各会へ細やかですが支援させて頂いて居ますことをご報告いたします。皆様からのご支援を支えに、細々ながらこの活動を続けて参りたいと思っています。共同体の大勢の方たちとの交わりの中で、祈りながら活動できますことを感謝申し上げます。

本年度もよろしくお願ひ申し上げます。

感謝のうちに

アフリカ支援
エマウス友の会
六甲教会
ハイチ地震支援
(国境なき医師団)
チリ地震支援 (教会へ)

📖 図書紹介

『^{たび}旅 ^{ちから}力』 塚崎 雄一 著 (2010年3月 大盛堂書房)

この本はカトリック六甲教会の信徒、塚崎雄一さんが六甲学院を退職した2006年から2009年にかけてヴェトナム・ミャンマー・ラオス等を旅行し、またヒマラヤをトレッキングした時の旅行記です。旅力というのは、旅が塚崎さんを日常の生活から解放し新しいエネルギーを与えてくれる、という彼の思いが込められた書名です。

旅を通していろいろな人たちとの心の触れ合いが書かれた「人間讃歌」の本でもあります。特に圧巻はヴェトナム旅行記です。塚崎さんは学生時代に洗礼を受け就職で神戸に来た次の年にヴェトナムを訪れ、ヴェトナム戦争の戦渦を目の当たりにしてショックを受けます。たまたま現地のお嬢さんに親切にされたのが縁で帰国後も彼女と文通しますが、結局二人はそれぞれ別の道を歩むこととなります。なんだか小説の題材になりそうなロマンチックな話です。娘さん一家はボートピープルとなります。六甲の学生会館に彼らが収容されていた時に塚崎さんが娘さんの母親に再開するくだりには思わず涙しました。彼は35年後にヴェトナムを再訪しています。青春時代の一こまを胸に秘めて……。

ヴェトナム以外では日本人があまり経験しない10日間にわたるヒマラヤトレッキングも興味深い読み物となっています。また、彼が旅行中に読んだ書籍によって自分を見つめなおしている箇所も彼の人柄がわかって興味をそそられます。

(柁木)



『悪魔のささやき』 加賀 乙彦 著 (2008年 集英社新書)

神を信じているとは言っても、肉体をもって生きている人間は肉体の制約から逃れることは出来ません。わたしたちと同じ信仰を持つ精神科医の考えることは、信仰を持って日常の生活をするわたしたちが心得ておかなければならないことを示していると思います。一度読んでおくと良い本だと思います。

マスコミ等が最近では本が読まれなくなったと書きたてています。情報伝達手段が多様化したためか、最近では信者も昔ほどは本を読まなくなったのではないのでしょうか。

「人間は誰も誤りを犯すものです。その時点ではまだ見えていない事実もある。人間は弱く、愚かなものであり、自分もまたその一人だということを常に念頭に置いておくこと。そして、内なる偏見や自己防衛というフィルターをはずし、さまざまな立場から語られた、それも自分と意見を異にする情報をより多く拾い上げ、できるだけ客観的に弁別し、考察していくことが大事なのだと思います。」(同書P181)

もっと多く読み、もっと多く書き、もっと多く語り合うことが必要ではないのでしょうか。

(ヨハネ 三好)

広報部からのお知らせ

広報部では2010年度「教会のしおり」を作成しました。年間教会行事を始め、教会内のしくみ、冠婚葬祭や地区会の紹介など盛りだくさんに掲載しております。

必ずご家庭で一冊保管いただき、お役立て下さい。4月10日(土)19:00、11日(日)の各ミサ前後に配布する予定ですが、受け取れない方は事務所までお問い合わせ下さい。

超教派パエリアの集い

片柳 神父

3月28日の晩、カトリック神戸中央教会で教派を越えたキリスト教徒の若者たちの交流会があった。

一昨年の神戸市民クリスマスから始まった試みで6回目になる。今回は神戸近郊の日本キリスト教団、日本聖公会、バプテスト、カトリックの諸教会から合わせて60人くらいの若者が参加した。

集いは、夕方5時にテゼの祈りから始まった。わたしは写真展の関係で間に合わなかったのだが、祈りの集いの段階から40人くらいが参加していたようだ。わたしが着いたときは、自己紹介の真っ最中だった。自己紹介の途中にもわたしのように遅れた参加者が続々と到着し、今回の集いの一つの目玉であるシリロ神父のパエリアが運び込まれてくるころには60人ほどの若者が集まっていた。

シリロ神父ははりきって100人前のパエリアを作ってくれたのだが、20代の若者たちの際限ない食欲の前に大鍋一杯のパエリアはまたたく間に消えていった。実際、シリロ神父のパエリアは何杯でも食べたくなるくらいおいしくて、わたしも2杯お代わりした。もうないのかなと思っていたころ、ぬかりないシリロ神父の差配で2つ目の鍋が運ばれてきた。

パエリアで満腹になったころ、聖ミカエル教会のNさんの司会で教会対抗のゲーム大会が始まった。次の超

教派交流会をどの教会でやるかを賭けて、女子は指での数合わせゲーム、男子は腕相撲で戦った。特に盛り上がったのは腕相撲で、栄光教会代表の大柄な選手に誰が勝てるのか、姿形だけでなく、しぐさや性格までそっくりなため「双子」ではないかと疑われている聖公会代表の選手とカトリック教会代表の選手のどちらが勝つのかなど、見せ場のたびに熱い声援の声が飛び交った。結局、栄光教会代表に勝てる者は誰もおらず、次の開催地は栄光教会に決定した。

「同じイエス・キリストの十字架と復活に希望を置くわたしたちの間に、本来隔たりなどあろうはずがない」という確信のもとに始まったこの会だが、会を重ねるたびにその確信は深まってゆく。この会が、教派を越えたキリスト教徒の一致のしるしとして発展していくことを願ってやまない。

※ 全国でもめずらしい画期的な集いということで、後日、「カトリック新聞」にもこの集いの記事が掲載される予定です。



教派を越えたキリスト教徒の若者たち



シリロ神父のパエリア



男の料理教室

毎月第三水曜日午前9時から正午、イグナチオ・ホールと厨房で男の料理教室を開催。女性料理長の指揮下において、戦場を彷彿させる調理場の元強者たちの俊敏さと手さばきは、神業(?)のようである。

今回、この男の料理教室に招待されて3回目。正直行って初めてのとき、忍耐と体力を心配した。ところがテーブルに並んだ料理を見せられ、「あっ！(美味そう)」と驚きの声を発した。しかしその頃、体調今一、料理のお味が掴めません。二回目は昨年暮れ、教会の建物中に美味しいにおいが充満、今日の料理は何かと期待に腹(?)をふくらませ、ホールへ急いだ。「おお〜！すご〜い！」(第一回目よりさらに大きな驚き)。「こんな料理が出来るんですか？」と思わず質問した。そして、今日が3回目、朝から腹を悩ますにおいが三階まで漂う。美食は期待を超越「美味しいんです。とにかく美味しいんです。」

『み言葉』の味わい方が今一つ掴めないとおっしゃる方、その原因は「感動の欠如」ではないですか。是非、男の料理教室で実食してみても如何でしょうか。『み言葉』グルメの皆様！来年のミシェラン神戸は、男の料理教室ですよ。近々あなたにも招待状が届くかも・・・。

み言葉グルメより



広報部員のつぶやき

今年の4月は、信徒にとって大切な「聖なる過ぎ越しの三日間」で始まった。私も連夜の祭儀に与りながら、イエス・キリストの受難・死・復活をあらためて思った。教会報発行の時間的制約のため、今月号に信徒の思いなども掲載出来なかったけれど、日々の信仰生活の中で、この三日間のイエスの苦しみ、愛をいかに味わい、具体的行動に表せるか、私のこれからの信仰生活での課題である。

(T.H)

教会報5月号の発行は、5月2日(日)です。

編集会議は4月25(日)です。

記事原稿は、4月18日(日)正午までに信徒会館
受付へご提出願います。 (広報部)

<http://www.rokko-catholic.jp>

カ ト リ ッ ク 六 甲 教 会

〒 6 5 7 - 0 0 6 1 神 戸 市 灘 区 赤 松 町 3 - 1 - 2 1

電 話 0 7 8 - 8 5 1 - 2 8 4 6

発 行 責 任 者 松 村 信 也 神 父

編 集 広 報 部